

# 【とっても痒いガンベに！】

## はじめに

皆様、明けましておめでとうございます。昨年はいろいろな農家さんに本当にお世話になりました。今年も何かとご迷惑おかけすることが多いかもしれませんが、何卒宜しくお願い致します！

最近 M 情報をさぼりまくっていたので、年も明けて心機一転真面目に書こうと思います。

今回はガンベ（皮膚糸状菌症）について書いてみようかと思っています。

ガンベは本名を皮膚糸状菌症といい、地域によって【ガンベ】【トクフク】、海外では【リングワーム】なんて呼ばれ方もします。個人的には、東北・北海道はガンベ、九州や四国など温かい地域ではトクフクと言っている気がします。



皆さんご存じの通り、ガンベが命にかかわることはありません。また、増体に悪影響を与えるという報告がありますが肺炎や下痢など

と違い感染した牛が群内で明らかに小さいということにもあまりなりません。

ガンベの厄介な点は、感染力が強いことだと思われがちですが、個人的に一番の問題は、放置しても特に問題ないから見た目さえ気にしなければオッケー！と結構な割合の農家さんが思われていることだと思います。

下痢や肺炎・食い負けなど他にも哺乳～育成牛で気になるところは沢山あるのでガンベに時間はかけていられない！と正直自分も思ってしまうのですが、やはり見栄えも悪いですし痒みでストレスがかかり免疫が落ちてしまうこともあります。

そこで今回、簡単にできるガンベ対策をとある農家さんにご協力いただきデータを取って見たのでガンベにお困りの方は参考にいただければと思います。

## ① まず敵を知ろう！

### 1) ガンベの原因とは？

ガンベは糸状菌症の名の通り【糸状菌】と呼ばれる菌の感染が原因です。



糸状菌にはいくつも種類があり、犬や猫などペットでもよく問題になりますが、牛では【*Tricophyton verrucosum*】と呼ばれる糸状菌が原因の9割を占めています。長ったらしい名前なので今回はガンベ菌と呼ぶことにします。

### 2) ガンベ菌の性質

ガンベ菌の性質に関して実はあまり研究がされていないのですが、とある獣医大学が行った試験で【鉄】に住み着きやすいことが判明しています。この試験では、ガンベ牛がたくさんいる群内で、牛・スタンション、鉄柵、木でできた桶など色々なところから菌の検出を行ったそうなのですが、牛が痒くてゴリゴリ擦り付けていた木製の桶などからは検出されず、軽く触れる程度だった鉄柵やスタンションから大量の菌が検出されたそうです。

なぜ鉄に住み着くのかは僕が調べた限りでは明言している研究はないのですが、菌の発育に鉄が必要だからではないかと考えている人たちも居るそうです。

### 3) ガンベの治療

ガンベの治療はデータで証明されている治療薬から、民間療法までかなり種類があります。

もっとも一般的なのはナナオマイシン(ナナフロシン)という抗生物質の塗布です。これは製薬会社が正式なデータを取って発売しているものになります。

他にも、ヨード剤やサリチル酸膏剤、廃油の塗布、また真菌専用の殺菌剤による牛舎の消毒など



Total Herd Management Service

もありますがいづれにしても【頻回の実施】が必要となります。

この【頻回】というのがガンベ対策で心が折れるポイントです。そもそも牛が自由に走り回れる群飼育でよく問題になるのに、何回も牛に薬を塗るのは大変ですよね、、、

ましてや自然治癒することが多いガンベに毎日そんな時間はかけていられないと思います。ということで本題の**手軽にできるガンベ対策**の話に移りたいと思います。

## うべんき!!!!

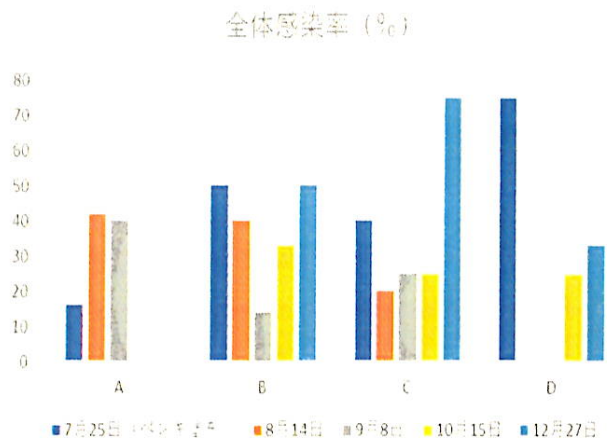
結論から言いますと、今回試してみた対策とは、ガンベ菌が住み着きやすい牛舎内の**鉄部分にペンキを塗る**という方法です。これは、ガンベ菌が大量に住んでいる鉄部分をペンキで覆い、鉄→牛への感染を防ぐという考え方です。一般的にガンベは牛→牛への感染が主だと言われていますが、よくガンベ牛いっばいの群を見ると、感染している場所はどこも同じような体の部位だと思えます。そこで今回は牛→牛感染よりも鉄→牛感染の方が多いのではないかと仮定してこの方法を実施してみました。

ちなみに、弊社は手柄の横取りに関して非常に厳しい会社なので先に断っておきますが、この方法は以前カーフサービスで行ったことがあり良好な成績だったそうなのですがデータを取っていなかったとのことで今回正式にデータを取って試験したいと思い農家さんにご協力いただきました。決して僕が独自に考えたものではありません(笑)

試験方法は、

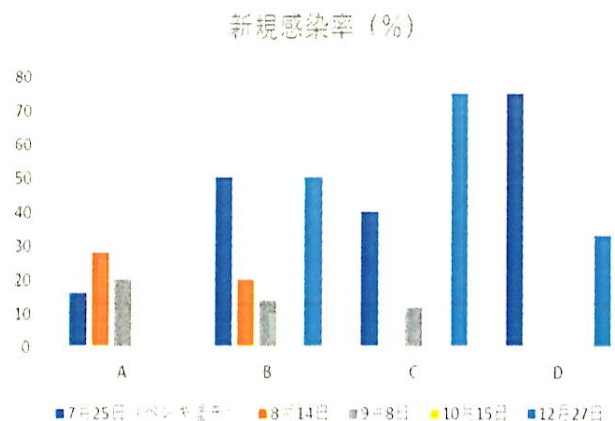
- ・離乳後～8カ月齢ほどで1群5～7頭ほどのサイズの育成牛（群内の4～5割程度が常にガンベに感染している）を対象に計4群で実施
- ・試験開始0日にペンキをネックレール・ペンを分ける鉄柵・支柱などに塗布
- ・2～3週おきに牛をチェックし新規感染牛の数と罹患牛のガンベの状態を把握

という内容で行いました。結果は以下の通りです。



このグラフは月齢ごとに分けたA～Dの4群の群内での比較です。群ごとに左からペンキ塗布日→約3週間おきに感染率を表しています。A群が離乳後の群で、BCDと進むにつれて月齢は大きくなります。【全体感染率】としているのは、**チェック時に前回はガンベに感染していた牛もカウントした状態**ということです。また、この農場では月に3～6頭ほど後継牛が生まれるため、およそチェック2回間に群構成が変わり新しい育成牛が群に入ってくるという状態です。

次に、【新規感染率】のグラフをご紹介します。これは一度感染した牛を除いて、各チェック時に新しくガンベの感染が確認された牛の割合を示しています。

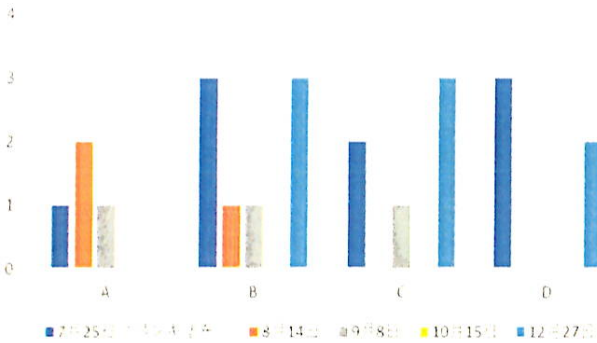


この2つのグラフから、BCD群はペンキ塗布から10月25日のチェックまで新規感染率の低下が認められました。全体感染率でみるとB群は10月15日のチェックで感染率が上昇していますが、これはすでに感染していた牛が他の群から移動してきたためでした。



Total Herd Management Service

新規感染頭数



頭数で見るとこのような感じです。試験の関係上、ペンキ塗布日に感染していた牛は全群で新規感染扱いにしています。

以上の3つのグラフから、

- ①新規感染率・頭数の低下→新しく牛群に入った牛や元々いた牛にガンベが蔓延しづらくなっている
- ②全体感染率の低下→元々ガンベに感染していた牛の自然治癒

がわかります。まとめると、ペンキの塗布によってガンベの感染を完全に0にすることは出来ませんが、蔓延防止に効果はあると考えてよいと思われます。また、12月のチェック時に爆発的に感染率が上がっているのは、塗布したペンキが剥がれたためと思われます。



(写真の青い部分が農家さんが塗布してくださったペンキですが、牛がよく触れる部分が剥がれてきてしまっています。)

### ③まとめ

最後に、今回の試験のまとめです。

前提として、今回の試験では統計学的な解析や塗布前の正確な感染率の増減を把握できていなかったため、効果を実証するものではありません。あくまで、試験の報告という程度にとらえて頂ければと思います。

ペンキ塗布によるガンベの蔓延防止対策は、ペンキ塗装が剥がれない限りは一定の効果はあると考えられる結果になりました。残念なことに新規感染率0とはなりませんでしたが、ペンキ塗布後の感染が牛→牛への感染なのかもしれません。

ペンキ塗布は牛の体に一切触れることなくガンベの罹患率を減らす対策の一つとして十分に有効なものではないかと思われます。

もし次回同じような試験をする際や、実施してみたいと思う農家さんがいた場合、ペンキを塗布するタイミングも重要ではないかと思われます。今回の試験ではガンベ感染牛がいるペンを塗装しましたが、もし可能ならガンベ感染牛群が移動後、次に未感染の牛たちが移動する前に塗装することが最も効果的ではないかと考えられます。

ガンベにお困りの農家さんはぜひ試してみてください！そして使用感をご教授頂ければと思います！

岩泉



Total Herd Management Service